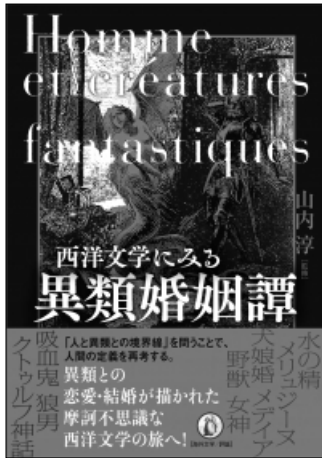


婚礼に足——騎士シュタウフェンベルク伝説とその周辺

須藤温子 著



溝井 裕一 (評)

人間が動物や妖精などと結婚する異類婚姻譚において、つねに問題となるのは「境界」である。ひとがこれらの他者に接近するとき、種としての境界、あるいは人間世界と異界の境界をまたがねばならない。しかし関係を結んだのちも、両者のあいだに横たわる「境界」は存在し、物語に緊張感を与える。境界が消滅するきっかけ、それが「死」であることもしばしばだ。

須藤温子氏が本書のなかでとりあげた、バーデン＝ヴュルテンベルク州のオルテナウ郡に伝わるシュタウフェンベルク伝説も、これにあてはまる。騎士シュタウフェンベルクがミサにおもむく途中、美しい水の精と出会う。二人はともに暮らしはじめるが、騎士には人間の女性と結婚してはならないという条件が課された。仮にこれを破ると、死が訪れるという。だがシュタウフェンベルクは、王からある女性と結婚するよう求められ、承諾してしまう。すると婚礼の場に、かの精霊の足が出現する。これを見た騎士は、3日後に息を引き取る。

須藤氏は、14世紀にさかのぼるこの伝説について、オリジナルはもちろん、グリム伝説集をはじめ

め各民話集に掲載された類話を片端から調査している。そして、水の精がかつていかなる存在とみなされていたかを、パラケルススの記述を主軸に考察し、さらに「足」や「婚礼」の象徴的意味についても論じている。

たとえばパラケルススによれば、自然の精霊は本来魂をもっていないが、人間と結婚すれば魂を獲得できるという。つまり水の精は人間と同等の存在となるべく、シュタウフェンベルクに接近し、境界を越えようとしたのだ。

だが騎士が彼女を裏切り、人間と結婚しようとすると、奇怪な足が出現する。須藤氏は、足がかつて「冥府や地下世界につながるもの」と理解されていたこと、民間伝承において婚礼 (Trauen) はしばしば葬式 (Trauern) に転ずることを、フケーの『ウンディーネ』の言葉を引用しながら指摘している。

ここでも、「境界」が問題になっているのは明らかである。足は冥界ないし異界と接するものであり、その出現はシュタウフェンベルクが「あちらの世界」へ呼ばれていることをあらわす。婚礼が、人生のターニングポイントをもたらす通過儀礼であることはいうまでもないが、その境界的な時間帯において、ひとは死にもっとも接近する。

水の精や人魚が人間のもとへやってくる話は、『人魚姫』『リトル・マーメイド』『崖の上のポニョ』など数多く存在するが、須藤氏は、ドイツに伝わる古の伝説をもとに、その本質を明らかにしたいえるだろう。

『西洋文学にみる異類婚姻譚』(2020年) 所収

山内淳編 須藤温子 (他) 著

小鳥遊書房 本体価格 2600 円

ヘルダリーン—ある小説

ペーター・ヘルトリング 著 富田佐保子 訳



木下 康光 (評)

邦訳で700頁に達するこの大部の書は一見そう思われそうな評伝、すなわちヘルダリーンの詩作と生涯を客観的に論評・紹介する評伝ではない。著者はそのためにわざわざ断って副題を„Ein Roman”としているのだ。すなわちここでは膨大なヘルダリーン資料が駆使されるものの、その利用の仕方は言わば恣意的で、学術的客観性はあまり顧みられない。副題を„Ein Roman”としたのは、この作品が創作にも等しい性格のものであることを断っているのだ。

ここでは伝記の小さな断片的事実から作者によって自由に想像の翼が広げられ、読者はヘルダリーンとその家族・友人たちとの間で交わされる会話の現場に立ち会わされる。その際、語り手たる作者ヘルトリングは語りの対象たるヘルダリーンに乗り移ったかのように同化・感入し、両者が融合・一体化しているかと思うと、だが次の瞬間には突如語り手は対象を突き放すといった語りがなされるので、読者はいま語っているのはヘルトリングなのかヘルダリーンなのか、途惑わされることさえしばしばなのである。一体いま誰の言葉、誰の思いが語られているのか困惑を覚えさせるよ

うな変幻自在な語りは内的モノローグを想起させるものであるし、またポリフォニックとも言える。この一見無統制な語りはときに読者に戸惑いを覚えさせ、ごたごたした印象をすら与えかねない。訳者の一番の苦労はおそらくこの点にあったろうと想像される。(ちなみにこのような語りの問題は本書から4年後に刊行された『おくればせの愛』では完全に解決され、この児童文学作品を成功作たらしめている。ここでは語り手たる作者の語る対象への自在な感入、死者の霊に憑依するかのごとき語りは、語り手(少年時代の作者)と語りの対象(作者の亡き父親)との距離の近さによって容易に達成されたのだった。)

一見無統制な感じを与えるこの語りの技法は、しかし、読者を無媒介的に伝記的な歴史の現場に引き込むことによって過去の時間を現在に蘇らせる。それによって読者は若きヘルダリーンのヘーゲルやシェリングとの交友、学寮や住み込み家庭教師の生活の実情を如実に知ることができるし、フランス革命とその挫折の空気にじかに触れることができるのである。いや、それよりもなによりも、この評伝でなく小説としての語りの技法によってでなければ、ディオティーマと呼ばれたゴンタルト夫人との運命的な愛の破綻による精神の錯乱が臨場感に満ちて描写されることはできなかったろうし、精神の闇に包まれたヘルダリーンの言葉が生々しく蘇ることもできなかったろう。

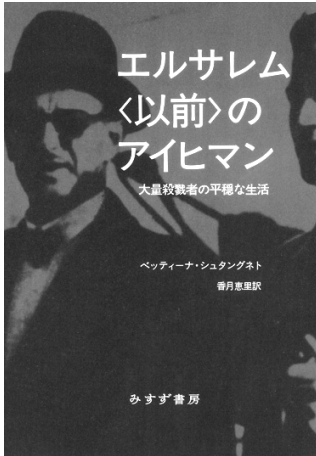
『ヘルダリーン—ある小説』(2021年)

ペーター・ヘルトリング著 富田佐保子訳

鳥影社 本体価格2600円

エルサレム〈以前〉のアイヒマンー大量殺戮者の平穏な生活

ベッティーナ・シュタングネット 著 香月恵理 訳



大下 理世 (評)

本書は、哲学者ベッティーナ・シュタングネットによる、元親衛隊中佐アドルフ・アイヒマンに関する最新の研究成果、*„Eichmann vor Jerusalem. Das unbehelligte Leben eines Massenmörders“* (2011)の全訳である。

本書の構成は、序章と終章を除く、6章立てとなっている。序章では本書の目的が述べられる。本書は、ハンナ・アーレントの「悪の凡庸さ」という表現とともに定着したアイヒマン像、すなわち、命令に従って業務を遂行した一介の役人という理解を批判的に再検討することを目指すものである。

第1章「私の名は象徴となった」では、アイヒマンが、自身の名がユダヤ人絶滅の象徴となっていく過程を正確に観察しつつ、権力への執着からユダヤ人問題に意欲的に関与した過程が書かれる。第2章「幕間劇」では、アイヒマンが第二次大戦敗戦後に自身の身元を隠し、旧ナチ支援のネットワークを利用してアルゼンチンに逃亡した経緯が描かれる。第3章「アルゼンチンのアイヒマン」、第4章「いわゆるサッセン・インタビュー」では、アルゼンチンで妻子と合流し偽名で平穏な生活を

送る一方、それに満足せず旧ナチ共同体に深く関わっていたことが示される。その際、アイヒマンが、自身の身元と反ユダヤ主義的な立場を隠さず、ユダヤ人移送政策担当としての自負を語ったことが指摘される。第5章「偽りの安全」では、ドイツ国内外の諸機関によるアイヒマンの搜索過程が描かれ、イスラエルの諜報機関モサドによるアイヒマンの拉致とイスラエルへの護送までが論じられる。第6章「役の変更」では、エルサレムでのアイヒマンの言動は、自己を正当化し自身の役割を小さく見せるための演出であったことが指摘される。終章では、アイヒマン自身の文章や音声録音等の史料が、当事者や出版者、関係省庁など様々な利害関係の影響で、これまで網羅的に分析されてこなかった経緯が説明される。

本書の第一の意義は、膨大な史料を収集し体系的に分析することで、「悪の凡庸さ」という表現とともに定着した従来のアイヒマン像が彼自身による演出だったことを明らかにし、今後のアイヒマン研究の発展に道を開いた点にある。また、それにとどまらず本書の射程は戦後史研究にも及ぶ。特に、アイヒマンら旧ナチ戦犯を支援したドイツ国外のネットワークやその歴史修正主義的な試みを実証的に詳らかにした本書は、戦後ドイツの「過去の克服」研究にも寄与することが期待される。

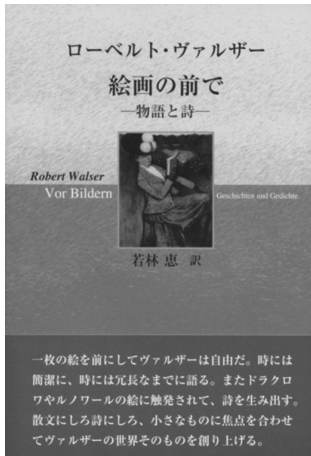
『エルサレム〈以前〉のアイヒマンー大量殺戮者の平穏な生活』(2021年)

ベッティーナ・シュタングネット著 香月恵理訳

みすず書房 本体価格 6200円

絵画の前で ―物語と詩―

ローベルト・ヴァルザー 著 若林恵 訳



ヒンターエーダー＝エムデ・フランツ（評）

ヴァルザー文学の読書歴が長い者にとって、この作家を和訳で読むことは、ある種の既視感を伴う、しかし同時に、読み流すこともできない新鮮な体験である。日本語においてヴァルザーの語りがどのように響くのかは母語話者ではない私には正確には分からない。しかし、日本語はヴァルザー文学になんとなく適しているような気がする。

『絵画の前で』は、絵画をめぐる散文や韻文の小品を紹介する作品集である。ここでの文章は絵画そのものを客観的に描写するのではなく、むしろそれが見る主体の現実には織り込まれる体験を描いている。そのせいもあってか、これらの絵画はヴァルザーにとって、現実、記憶、雰囲気、夢など種々雑多な要素を呼び出し、結びつける刺激物のように働く。つまり、絵は、訳者が指摘しているように「夢想」を引き起こすものである。

絵画が鑑賞者である作家にどのように語りかけてくるかは「ファン・ゴッホの絵」で模範的に描写されている。絵を観た瞬間、反射的に拒否感を覚えつつも、この反応に疑いを感じ、作品の未知な魅力を察知すること、しまいにはこの絵の主人公が喋り出してくれること、このような過程は、

常識にとらわれることなく絵というものを観照する方法のレッスンにもなっている。また、マネの「オランピア」では、ヒロインが「最高に魅惑的な全身脱衣という豪華な輝く衣装をまとって」ソファに横たわっている部屋は、この物語を創作する詩人の仕事部屋である。このように絵画の虚構と物語の虚構は予想せぬやり方で連結されている。

ヴァルザーは読者の視線を絵の中へ誘い、独特な文脈を加えながら、額縁を越えながら、独自の世界へ導いてゆく。ウェイデンの「ピエタ」にある葉っぱのない木など、キャンバス上の細部は、物語の中心に置き換えられる。ここでは、一見取るに足らないものが語り手の注意を引きつける。ヴァルザーは、日常的なもののうちに叙述に値する価値を見出す。詩趣はしばしば目立たないところにあり、内容の重要性を重んじる通常の物語とは対照的である。

翻訳者の若林氏はヴァルザーの独特な文体に対する深い洞察力を持ち、その豊かな経験を生かした訳文を紡いでいる。ただ、その繊細な読解のうちにも、ごく稀に見落としは混じりこむ。例えばホドラーの「山毛櫨の森」をめぐる文章において、ドイツ語原文での „hantieren”（＝作業する）は、訳文では「狩」となっている。丁寧な解説文がこの作家の書法についての格好の入門ともなっているだけに、ここでこの小さなミスを指摘しておく次第である。『ヴァルザー作品集』刊行以来、ますますその数を増やしつつある愛読者にとって、さらにヴァルザー文学に近づくための、重要な一歩となる好著である。

『絵画の前で ―物語と詩―』（2021年）

ローベルト・ヴァルザー著 若林恵訳

鳥影社 本体価格 1700円

ピアニスト

エルフリーデ・イエリネク 著 中込啓子 訳



小川 さくえ (評)

今回の書評執筆にあたり、私は、初めてイエリネクの文学に触れた1987年のことを思い出した。当時、現代文学に関心のある関西在住のゲルマニスティネンが月に一度集まり、ドイツ語による読書会を行っていたのだが、そこで取り上げられた作品の一つが『ピアニスト』(1983)だったのである。中込啓子氏の初訳が出版されたのが2002年、イエリネクのノーベル文学賞受賞が2004年なので、読書会当時、この著者の名前には日本ではほとんど知られていなかった。しかし本書に接した私たちは、この作家の才能に舌を巻き、いずれ世界に名を馳せる作家になるだろうと確信したが、言語遊戯が頻出する上に、文中の言葉が意味を変え、場所を変えながら幾重にも響き合うイエリネク特有の多声音楽的な文体、あるいは「多層的な比喩語法」と称される文体には、正直ほとんど手を焼いた。そのせいもあって中込氏の初訳が出たときには、氏の計り知れない苦労を推測して、驚嘆の声を上げずにはいられなかった。しかも今回は、氏の二度目の挑戦なのである。

作品の内容に関しては、すでに初訳の出版当時、詳しく紹介されているはずなので、ここでは主と

して新訳の特徴について述べたい。新訳は、単に誤訳の訂正や、わかりづらい箇所への修正にとどまらず、全体にわたる徹底的な改訂に取り組んでいる。とりわけ、晦渋な原文のニュアンスを損なわないように、できるだけ日本語として読みやすく工夫された訳文には感心せざるを得ない。そこには、初訳から20年近い年月を重ねた訳者の豊富な経験と熟成が感じられる。また丁寧な訳注の追加は、ノーベル文学賞を受賞したことによって専門家だけではなく、日頃ドイツ文学とは縁のない一般の読者の目にとまることを考慮したものである。それらの注は見開きページの終わりに付いているので、ページをめくる必要がない。さらに、訳者による介入として賛否両論あるかもしれないが、テーマの区切りに新たに算用数字が施されていたり、「彼女は〔音楽レッスンの帰宅途中〕」のように本文中に訳注が入ったりするのも、読者にとってはありがたい。

そして本書の特徴の一つが32頁におよぶ新訳版「訳者あとがき」である。イエリネクの人柄と仕事について、また翻訳で苦労した点など、興味深い内容が平明に語られている。イエリネクは、名前こそ有名であるが、実際に作品に接した人は多くない作家であろう。この機会に、ぜひ本書を手に取り、イエリネクの文学世界に一歩足を踏み入れてもらいたい。

『ピアニスト』(2021年)

エルフリーデ・イエリネク 著 中込啓子 訳
鳥影社 本体価格 2600 円